



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4248
FAX 095(842)4460

188殉教者の 列福式一周年にあたって

長崎大司教
高見 三明

二〇〇八年十一月二十四日は、朝から激しい雨が断続的に降り、列福式の進行が案じられました。式の直前に雨は上がり、予定通り始めました。式中も雨雲が重く垂れ込め、冷たい風も吹きましたが、時折陽もさして列福式は荘厳にそして感動のうちは無事修了しました。今回の列福式は、これまでの二十六聖人、二百五福者、十六聖人の場合とちがって、日本の司教団が積極的に準備に取り組み、殉教者も北は米沢から南は鹿児島までの川内に至る各地で殉教した全員日本人、式場も日本という点などが特徴でした。式の準備と進行のためにさまざまな形で協力して

くださった方々の働きも特筆に価します。この列福式を機に今後、過去に埋もれて今までよく見えなかった殉教者の信仰の生き方をわたしたちが再発見し、宝とも言えるその霊的遺産をこれからの生活により意識的かつ積極的に生かしていくようにしなければならぬと思います。溝部脩司教様の『キリシタン時代の司祭像に学ぶ』などの出版物も大いに助けになります。

1. 列福式一周年記念巡礼

さて、列福式一周年にあたり、教会の慣例に従って、教皇様に列福式

の認可を感謝するため、全国から募集された司教七名を含む一六七名の巡礼団がローマを始め殉教者ゆかりの地を訪ねました。謁見で、日本の巡礼団が紹介されると皆で小旗を振って歓声を上げて存在をアピールし、教皇様からは歓迎のことばをいただきました。そして団長の岡田武夫大司教様が司教団を代表して教皇様に感謝のことばを述べ、聖遺物を献呈しました。

長崎教区の巡礼団は、とくに中浦ジュリアンが天正少年使節のとき残したローマからミラノまでの足跡の一部を辿りました。それは殉教にながら道でもあったのです。

2. 長崎巡礼月間

昨年六月頃TCA(シンク・カトリック・アジア)からの提言を受け、教区本部事務局で列福式一周年記念教区行事を検討し始めました。「司祭年」にちなんで、4名の司祭にスポットをあてることにし、当該教会と地区評議会の意見を聞き、顧問会にはかつて、巡礼および講演とミサを行うことにしました。すなわち、列福式一周年記念日の頃からクリスマス前までの4回の週末を利用して、

土曜日の午後巡礼を行い、日曜日の午後講演とミサを行うというものでした。いずれも全国から多くの人が参加していただくことを目指しましたが、準備期間や資金の問題があり、また身の丈にあつた行事を行なうことを考えた結果が、今回実施したような内容となりました。実際、ほぼ予定した通りに推移したと思います。神様と、協力してくださった多くの方々に心から感謝申し上げます。

来年も別の殉教地、たとえば「生月」、「有馬」、「島原」、「雲仙」を中心に企画することも考えられます。何よりも、今後できれば是非、同じ時期に、つまり十一月下旬からクリスマスにかけての四週間、毎年、長崎教区で企画する巡礼関連行事が行われるようにし、それを「長崎巡礼月間」として定着させたいと考えています。それが、信仰の先達の生き方を想い、信仰と愛に燃え、宣教に対する熱意をかきたてる助けになればと願っています。

3. 今後の列福・列聖に向けて

列聖列福特別委員会は、高山右近の列福および二〇五福者の列聖に向けて活動を強化する意向とうかがつ

ています。因みに、二〇五福者のうち十五名は韓国人であったということがわかっています。豊臣秀吉によって強制的に連行され移住させられた韓国人の屈辱と悲哀に共感すると同時に彼らの信仰の強さを賞賛せずにはられません。また、わたしたち長崎の教会にとっては、浦上四番崩れや五島崩れの殉教者たちや永井隆先生の列福も考えなければならぬと思います。ブラジルでは中村長八神父様の列福の準備も進められています。このような動きが神様のみ旨にかなう有意義なものとなり、実を結びますように祈りましょう。



Q&A



列福式からの出発

Q・あの列福式から早いもので一年が過ぎていきました。ちまたには所詮イベントにすぎないという意見も聞かれます。結局は色あせていくのでしょうか。

A・確かに表面だけを見ると単なるイベントであり、したがって一過性の要素を含んでいるものです。

三万人が集まった長崎ビッグNスタジアムは、今は何もあの歴史的イベントの痕跡を留めてはいないし、現代の日常が繰り返されています。

しかしいろいろな考え方はあるにしても個人的レベルでは人生の転換点を体験した方が実際に居たことも事実です。

「二、三人が集まるところに、わたしもいる」(マタイ18・20)と言われた神の臨在体験は二、三人どころか二、三万人も集まったわけですが、そこに何らかの信仰体験がなかったはずはないわけです。ただご指

摘の通りイベントとしての限界があることも確かです。それはいま各地で殉教祭が行われておりますが、そこにフツと割り込んで来る「マンネリ」という怪物の正体を探ることと、同一線上にあるのではないのでしょうか。少なくとも指導的立場の方々はこのマンネリ退治こそ重要課題として、格闘しているというのが現状だと思います。

Q・イベントの意義は認めるにしても、イベントの限界を克服するにはどうしたらよいのでしょうか。

A・まず一般論から言えば、イベントは目的なのか手段なのかということキチツととらえることではないでしょうか。

いきなり難しい理屈で恐縮ですが、イベントが単なる目的であれば、それを行うことに意義があるわけで、準備から実行までマニュアルに従って行えば事足りるようになります。しかしイベントは目的ではなく手段であるということになれば、これを利用して別の目的を達成しようとするでしょう。

現代の教会が列福式を行うのも、これを手段として現代の教会のあり方をイエス・キリストのあかしが可能な姿にチェンジさ

せたいという目的があることは明らかです。ですからこの手段と目的をピシッと捉えて、各々の団体や個人がこのイベントに向かい、このイベントから出発すれば大きな効果を生むことになるのではないのでしょうか。

Q・列福式も結局は殉教祭だし、いま長崎教区では殉教祭があちこちで行われるようになりまして。それだけに「現代の殉教」というテーマをよほど深めないと、マンネリに陥っていくのではないのでしょうか。

A・おっしゃる通りだと思います。ですから一昨年の列福式に向かうにあたって「殉教者に倣う」というテーマを、できるだけ掘り下げる試みがなされました。殉教者というと、ともすればその死にぞまが強調されますが、その生きざまに目を向けるよう促されました。

殉教者家族の信仰とか、信徒としての活動とか、どこまでも信徒に寄り添う司祭の姿などを黙想しようとしたわけです。この試みはそれなりに効果のあることだったと思います。要はこれから先一貫してこれらのテーマを熟成させ、信仰体質の改善にまでつなぐかどうかということですね。その一貫性を持って、あるべき姿を情熱をもって

追いかける限り、殉教祭は決して色あせることはないでしょう。

Q・殉教者に倣い、教会に通い、よく祈りをしようという一貫した目的ならわかりますが、信仰体質の改善と言われてもよくわかりませんが・・・

A・そのことはよく指摘されることです。信仰とはそんなに難しいものなのかと。もつと単純なやり方はないのかと。

全くその通りだと思います。では極めて単純な一点を差し上げましょう。「イエス・キリスト」という一点です。それでもピンと来なければ、自分の家庭でも教会でもいいですから十字架のイエス・キリストをくり返し、くり返しながめることです。その天と地、右と左の真ん中に位置取りをしておられる十字架の形を確認したら、自分の生活はこのように片寄ってない真中に自分を置いたものになっっているか少しだけ反省してみることでいい。それだけでよろしい。単純明快です。

わたしたちはいろいろな風説や断片情報に踊らされ、付和雷同して考え方が片寄り、結果として自分を安全地帯に置き、気付かずして他人を傷つけている場合があります。

神さま、神さまと言いつつ、人間を軽蔑したり、「外部のもの」と決めつけて、教会と社会の境を超える努力を怠ったり、豪邸や高級車の中から「貧しさ」を説くことがあります。

イエス・キリストの姿はその中間にあり、しかもその中間を深く掘り下げたところにあります。

今年「司祭年」です。司祭とは専門職の司祭のみならず、共通祭司職として信者すべてが司祭なのです。

司祭とは神と人間の仲介者です。まさしく神の国は「間」にあり「真ん中」にあります。たとえ宙ぶらりんの姿に見えようと、十字架のどつちつかずを体現できたら、それはイエス・キリストのあかし。殉教に大いに近い信仰体質ということになるでしょう。

殉教者に倣ってイエス・キリストの証を身に帯びた信仰者を目指したいものです。



新しい要理

「共に歩む旅」(22)

第二十課 「洗礼の秘跡

：犠牲と愛」



【進行係】(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「二人か三人の方が祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」

(誰でも自由な祈りを捧げる)

A. 私たちの生活

【進行係】

「どなたか次の話を読んでくださいませんか。」

「目」を献げた明るい話題

光のよるこびを知らない盲人へこの世の光を通し、また「天国をも見られる信仰の光を」と生前から指導司祭に依頼し、このほど逝った奇特な信者が話題になっている。

井場寿夫さんは兵庫県尼崎市の

工場で働くうち結核に罹った。そして西宮市上ヶ原十番町にあるクリスト・ロア病院に入院、一年後受洗し神の恵みに浴するようになり、病苦の中でその信仰を守りつづけ、去る二月一日、四十三年の生涯を閉じて帰天した。

井場さんは病床の苦しみの中の真の慰めは、神からいただいた信仰の光の中にあることを知った。そしてその感謝を表すため、何かを捧げたい。だが病床で出来ることそれは「信仰の光」を見ることの出来た自分の目を、誰かのために役に立てたいと決心したのであった。

これを三年前、指導司祭に霊的遺言し、その日の来るのを待って

いたものだが、臨終のときも固いその意志は変わらず、くれぐれも依頼して逝ったのである。

クリスト・ロア病院付司祭・マック・ヴィトオレ師が、以上を伝えて来た人だが、付け加えて次のように言っている。

『井場さんの目は、アイ・バンクを通じて、いま誰かに光を与えているでしょう。どうぞその人が井場さんの望んだように、地上の光だけでなく信仰の光による「永遠の心の光」をも受けられるように、私は心から望んでいます。』

(昭和41年2月27日カトリック新聞「天国の光を盲人へ」より)。

【進行係】(参加者たちに質問する)

①ご自分の目を他人に提供した井場寿夫さんの内面を動かしたものは何でしょうか。

②自分の臓器を他の人に与えることについてどのような考えをお持ちですか。

B. 神の心は

他の人々のために全生涯を生きたイエス様は、父なる神のお考えどおりにご自身を奉げました。

十字架の上で亡くなったイエス様の犠牲により、神の子らは救いを得ました。ミサのたびに私たちは十字架の上で私たちのために命をささげてくださったイエス様の尊い愛を記念し、その愛を受けとり、これを他の人々に捧げる準備をします。

【進行係】

「どなたかマルコ14・22・26(主の晩餐)を読んで下さいませんか。」

・ ・ ・ 聖書を読む

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

・ ・ ・ 聖書を読む

「聖書の本文の中で心に響く単語や句を選んで、一人ずつ順番に祈りの心で3回づつ唱えてください。」

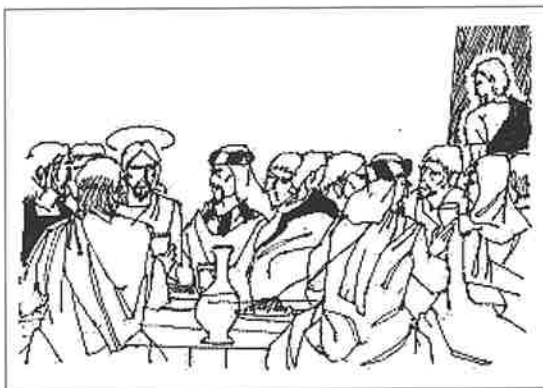
「2分間沈黙し、神さまが私たちに話しかけられることに耳を傾けましょう。」

【進行係】

「あなたにとって、個人的に心に響いた言葉は何ですか。自分が選んだ単語や句がなぜ心に響いたかお互いに話し合ってみましょう。」

イエス様は、ご自分の体と血、すなわちご自分のすべてを私たちにくださいました。

聖体はキリストの体で、御血はキリストの血、これは私たちの生命の糧になります。



わたしは生命のパンである。あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。

しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパン

とは、世を生かすためのわたしの肉のことである。(ヨハネ 6・48・51)

【参考聖書】

* マタイ 26・26・29
主の晩餐

* ヨハネ 6・26・59

イエスは生命のパン

* ヨハネ 13・1・20

弟子たちの足を洗う

* Iヨハネ 3・11・18

互いに愛し合いなさい

C. わらわー一歩進んで

旅をつづけよう

教会は主のことばにしたがって聖体祭儀を行います。聖体祭儀のことをミサといいます。ミサはキリスト者の信仰生活の源泉であり頂点です。ミサにあずかるわたしたちは、わたしたちに体と血を与えてくださったキリストにならない、他の人々のために自分自身を完全に空っぽにできる姿勢を学びます。ミサとともに聖体を分かち合った者は自然に、家庭や職場、わたしたちの生活するすべての場所で、他の人々とともにパンを分かち合

うようようになります。

【進捗係】(参加者たちに質問する)

①周囲の人々を助けるために自分を人知れず捧げている人を知っていますか。その人について話しあってみましょう。

②他の人々のために奉仕できることは何か、話し合ってみましょう。

【進行係】

次の「愛徳唱」を唱えながら集会を終わります。

愛の源である神よ、わたしは、心を尽くし、力を尽くして、唯一の神であるあなたを愛します。
また、あなたへの愛によって隣人を自分のように愛します。

【進行係の心得】

*キリストを心に受けるということとを越えて、食べ物として食べるといふことの意味を考える。
イエス・キリストを血とし肉とするとは完全に一体となり、私たちが神の愛の火を点火することです。

【覚えましょう】

66. 聖体拝領の準備はどのようにしますか

* 洗礼の秘跡を受けた信者だけが聖体を拝領することができ、ゆるしの秘跡を受けて大罪のない状態でなければなりません。

67. 聖体をどのように拝領しますか

* 左手を上にして聖体をもらい、右手で取っていただきます。

68. 聖体訪問はどのようにしますか

* 聖体の中におられるイエスを訪問し、挨拶を捧げて対話を交わします。

69. 聖体の秘跡は何度も受けてもいいですか

* 「聖体の秘跡」「ゆるしの秘跡」「病者の塗油」は、全信徒が与えられた使命を果たすため繰り返し受けることができます。



永井隆博士と

「神の摂理」 の問題

長崎大司教区司祭
山内 清隆

C 摂理は神の愛の表現である

さらに驚くべきことに永井は、神の摂理を、神の愛の表現とさえ公言しています。この点についてかれは、その著書、『この子を残して』で、次のように表現しています。

「主与えたまい、主取りたもう。主のみ名はつねに賛美せられよ！」

元来私は、無より神によって創造された。母の胎内に宿った時が私の創造であった。その時以来今日に至るまで、私の得たすべての物は皆神の与えたもうたところである。健康、才能、地位、財産、家族など、すべて元来私の所有ではなかった。だから、いづどこで、これらのものを取り上げなざっても、私は損をするわけではなく、また得をするわけでもない。別に嘆き悲しむには当たらない。御摂理のままにお任せするのが当たりまえである。そして摂理はつねに感謝して賛美せられるべきものである。神は私を愛したくて、私を創造なさった、神に悪意の創造はない。神は常に私を愛し、絶えず私の幸福を願っておられる。与えたもうのが愛の思し召しによるものであると同じく、取りたもうのも愛の思し召しによる。わたしの身のまわりに起こるすべては、神の愛の摂理のあらわれである。それゆえ私はいかなる目にあおうとも、神の御名を賛美せずにはおられない。……

それを見た生き残りの私たち

は、原子爆弾は決して天罰ではなく、何か深いもくろみを持つ御摂理のあらわれにちがいないと思つた。

私も同じ日、無一物の弱り果てた者となつて、幼い二人の子をかかえて焼け跡に立たされたのだが、これは何か知らねど、愛の摂理のあらわれである、と信じて疑わなかった。それから三年の月日をしのいで今日に至ったが、あの日の私の信仰が正しかったことが次第次第に証明されてくる。……」

このように永井は、すべての出来事を神の愛の摂理として受け入れています。それゆえにかれは、すでに宣告されている自分の死さえも、神の限らない愛の表現である摂理として甘受する覚悟をも表現しています。かれは同じ『長崎の鐘』で、「やがて私を訪れる『死』もまた、限らない愛にまします神の私に対する最大の愛の贈り物であろう。それゆえ、死の前に通らなければならぬ心の悩みも体の苦しきも、神のみ栄えへのあらわれのために必要なものとして、悦んでこれを受けようと思つている」と予告しています。

永井のご子息・誠一氏は、その著、『永井隆』（サンパウロ）で、

父の最期について、次のように記しています。入院するなり永井は、周囲の人々をいつものように冗談をいって和ませ、すこしも死を直前にしている人のように思えませんでした。もちろん本人は、極度の精神的・肉体的苦痛に耐えていたはずですが。その後、永井がよく安眠し、小康状態を維持していたので、主治医も久松婦長も病室を出、誠一と歌子さんだけが隣室で仮眠をとっていたときでした。突然、「イエズス、マリア、ヨゼフ、お祈りください」と叫ぶ永井の声を聞き、誠一は、急いで父の病室に駆け込みます。かれはその時の父の様子を、「父に取り乱した格好はまったくなく、上を向いた正常の姿勢で両目を閉じていた」と記しています。永井は、波乱万丈の生涯を、このように静かに、そして安らかに迎えたのでした。これも、かれが、苦しい死さえも、神の計り知れない深い愛の摂理として受け入れていたからではなかったでしょうか。

D 活発な活動の源泉としての摂理

多くの人々は、摂理という言葉を聞くだけで、そこに「運命的」で、「決定的」な何かを直観し、

嫌がりません。またマルクスや、サルトルやニーチェによって代表される無神論的実存哲学者たちは、「撰理」を、人間の「自由」を否定し、「活動性」、ないし「自発性」を弱め、阻止する障害として否定します。しかし真の意味での「神の撰理」は、むしろ、人間に、さらなる活性力と勇気を与え、どのような逆境にあっても、わたしたちに力強い樂觀的な再出発を可能にさせます。わたしたちはそのよき実例を、永井の著書にしばしば読み取ることができます。

永井は、被爆後の無残な状態から這い上がるかと日夜努力していた浦上の人々の生き様について記している『花咲く丘』の「序にかえて」の中で、復興に努力する浦上の人々の、明るく、力強い様子を、次のように記しています。

「浦上はいつも、『静かな明るさ』がある。こんなひどい荒野にされたのに、騒々しく騒々しくまわるのでもなく、暗い絶望にとざされるでもない。何事か起こると、村人は、『おほしめしですたい』と言うだけである。おほしめしとは神の御意によるということ、与えたもうも、奪いたもうも、みなおほしめしのままに……。そしてすべてを

神に感謝し賛美するのである。これは『仕方がない!』とあきらめるのとまったくちがう。いかなる事も神の愛の贈り物であるから、ありがたく受け、我を愛したもう神を賛美し、『さあ、いつちよう気張りましょうデー!』と、お互いに励まし合って、神の示された御意にかなうように新しい努力を始めるのである。それゆえ絶望も無関心も放心もなく、明るい希望と、温かい勇氣とがあるわけです。」

わたしは以前、復員してみると、家は跡形もなく焼け、妻や子供たちまで灰になっている悲惨な状態を見て、やはり原爆は「天罰」ではなかったかと迷っていたからでしょう。か、軍服のまま永井を訪ねた市太郎と永井の対話についてご紹介しました。この時、永井は市太郎に、浦上教会で行なわれる「原子爆弾合同葬」で、信徒代表として読む予定だった「弔辞」を市太郎に渡し、それを読むようにすすめています。市太郎は、最初それを大声で読んでいましたが、読み進むにつれ声が小さくなり、涙声になってつまります。市太郎は永井の考えに納得したのでしよう。そして市太郎は永井に、「先生、そうすると、わしら生き残りは何

ですか?」と尋ねています。その後の二人の問答が面白く、撰理が何であるかをわたしたちに示唆的に教えてくれますので、そのくだりの一部を以下紹介しながら、永井の撰理論の結論としたいと思えます。

まず市太郎の質問に永井は、「私もあなたも天国への入学試験の落第生ですな」と答えています。すると市太郎は、「天国の落第生、なるほど」と二人で声をそろえて笑った、と永井は記しています。市太郎は、胸のつかえが下りたよううだ。「よっぽど勉強せにや、天国で家内と会うことはできまっせんばい。確かに戦争で死んだ人たちは正直に自分を犠牲にして働いていたのですから、わしらも負けずによほど苦しまねばなりまっせんたい。」「そうですともそうですとも。世界一の原子野、この悲しい、寂しい、ものすごい、荒れた灰と瓦の中にふみとどまって、骨とともに泣きながら建設を始めようではありませんか。」撰理への信仰は、わたしたちに明るい希望に満ちた、樂觀的な未来を約束します。(完)



いずれもはがき
「如己愛人」から転載

大司教談話室 ⑫

宣教について



Q. 教会の根本的使命は「宣教」であるとし、しばしば強調されます。そのわりには、具体的なプランがよく見えて来ません。みんなで取り組んでいる具体的なプランはあるのですか。

A. まず用語の整理をしましょう。本誌第42号1〜3頁の岩島神父様の記事とQ&Aからもおわかりのように、十六世紀以降の教会の外に向けた活動は「布教」(ラテン語・MISSIO)と呼ばれていました。「カトリック大辞典」(昭和29年)によれば、「布教とは非キリスト教徒に福音を宣べ伝えるために教会から派遣された宣教師の活動をさす」と同時に、カトリック信者の再教育、養成、離教者の再獲得、いわば「教会内布教」をも意味しました。長崎教区で行われている「地区集会」や「年の黙想会」は後者の具体例と言えます。一六二二年に創設された「布教聖省」は、一九六九年に「福音宣教省」(正確には「諸国民の福音宣教のための省」)に改称されまし

た。第二バチカン公会議後の公文書では、まだ「MISSIO」(訳語は「宣教」)が多用されていますが(141回)、「福音宣教」という言葉が31回用いられています。これらの類似用語として「使徒職」があります。『信徒使徒職に関する教令』によると、「父なる神の栄光のために、キリストの王国を全地に広めて(預言職)、すべての人をあがないによる救いにあずからせ(祭司職)、かつその人々を通して全世界を実際にキリストへと秩序づける(王職)ために教会がつくられたのである。この目的に向けられた神秘体の活動はすべて『使徒職』と呼ばれるのであって、教会はこの使徒職を全構成員(聖職者・修道者・信徒)を通じ、それぞれ異なった方法によつて実行する。」(2番)

結局、「布教」=「宣教」、「使徒職」、「福音宣教」は基本的には同じことを意味しています。「福音宣教」について言えば、キリスト信者だけでなくすべての人を福音の力で「内部から変化させ、新しくすること」、「彼らが従事する活動、彼らの生活や具体的環境を変えようとする」ということを意味する(教皇パウロ六世)ので、「福音化」とも言い換えられます。さて、教区として「宣教」の具体的なプランを立てて実行しているわけではありませんが、まずはすでに行っていることを「宣教」の視点から見直すことから始めてはいかがでしょうか。たとえば、わたしたち自身の「福音化」のためには「信仰養成講座」、「聖書講座」、

小共同体づくりのための「小共同体入門講座」、聖書に親しむための「聖書愛読マラソン」などがあります。教会で行われる「典札」とくに「ミサ」、「葬式」や「結婚式」なども、信者だけでなく、そこに参列する信者でない人々のための宣教の場です。小教区・地区・教区主催の「殉教祭」も自分たちの信仰を養うためだけでなく、まさに信仰を証しする機会とすることが出来ます。また、各評議會は、内側の問題を討議し解決するだけでなく、信者の信仰生活の活性化と同時に、外に向けた福音宣教の方策を練る場でもなければならぬと思います。さらに、「教区諸活動部門」、それと連携する「連合婦人会」、「修道女連盟」、「聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」、「レジオ・マリエ」、「CLC」、「フォコラーレ運動」、「シナピス」など、すべての教会の活動は、自分たちの信仰を生き養うと同時に、その信仰を証しするものでなければならぬと思います。

二〇一五年の信徒発見百五十年を機に開催を考えている「教区代表者会議」で教区としての宣教の具体的なプランが議論されることを期待しています。ともあれ、宣教の対象は信者と信者でないすべての人の両者であるということ、宣教の力は何よりも「キリスト者としての生き方による証し」であるということをつねに念頭におく必要があります。

(高見 三明)



たばこが運んでくれた



2008年の9月中ごろ、私は自分の不徳のいたるところで、足の病気にかかり、フランススコ病院に入院しました。このときには浦上教会の皆様には大変ご迷惑をかけてしまいました。今でも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

その入院中の出来事です。入院中にも関わらず、私はたばこを吸いに喫煙所に行っていました。そこで他の患者さんたちといろいろな話をしました。仕事の話や野球の話、趣味の話など、そこで話をするのが毎日の小さな楽しみになっていました。

ある日、病院のチャペルでミサをしてから喫煙所に行った時のことです。そこにいつも来ている入院中の一人の女性がいました。するとこの方が私が持っていた「毎日のミサ」を見て言いました。「カトリックの方ですか」私は「はい」と答え、「もしかして神父様ですか」「はい」「どこの教会ですか」「浦上教会です」「私は浦上の信者です」私はびっくりしました。でも、このあと私にいろいろなことを話してくれました。長いこと教会に行っていなかったこと、家庭のこと、病気のことなど、今までのことを振り返りながら。その後も二人だけしか喫煙所にいないときには、いろいろと話してくれました。

しかし日に日に彼女の病状は悪化していききました。歩いて喫煙所に来ていたのが、車いすで来るようになりました。車いすで一人に来ていたのが、看護師さんに押されてくるようになりました。最後は酸素ボンベを車いすに積んでくるようになっていました。「たばこを吸う」ということもありましたが、いろいろな人と会うために来ているようでもありました。10月下旬、彼女は全く来なくなりました。喫煙所の仲間たちで集まるたびに「どうしてるんだろう」と心配していました。10月30日に、病院のチャペルの神父様が留守で私が病者の塗油に病室に呼ばれました。そのときには脈拍も下がっていていつ亡くなってもおかしくない状態になっていました。病者の塗油を授けるとき、病室には家

族はもちろんのこと、「たばこ仲間」もみんな集まっていました。授けたのち私は「みんな待ってるよ、たばこを吸いに行くよ」と声をかけました。すると彼女の脈拍が正常に戻ったのです。みんなびっくりしました。そして笑みがこぼれました。しかし残念ながら次の日の朝、神さまのもとへ旅立って行きました。訃報を聞いて病室に急いで行きました。家族がみんな泣いていました。その中で彼女に臨終の祈りを捧げました。

喫煙所に行く仲間たちが集まっていました。するとその中の一人が「神父さん、祈りをするんでしょ、私たちも一緒に行っていていいですか」と言い出したのです。この仲間たちの中には一人もカトリックの方はいませんでした。この日のミサは彼女のための追悼ミサになりました。

このたばこ仲間の中には他にも一人の男性がいました。上記のことも含めて、祈ること、そして教会について、聖書について関心をもつようになっていました。喫煙所でよくキリスト教のことについて話をしました。すると毎日ミサに来るようになりました。退院後も教会に行かれているみたいで、2009年のクリスマスに他教区のある教会で洗礼を受けることになったそうです。

入院という辛い中で神さまはただ苦しみを与えるだけでなく、たくさんの恵みを与えてくださいました。しかも手段が「たばこ」という害を与えるものと一般に言われるもので与えてくれるという不思議な神さまの力を感しました。

退院した「たばこ仲間」は今でもつながっています。何度か集まって会い、話をしたり、仲間たちで彼女の墓参りに数度、行きました。彼らの上に神さまの豊かな恵みがありますように。



教区本部事務局
司祭 鶴巻 健二

列福一周年記念

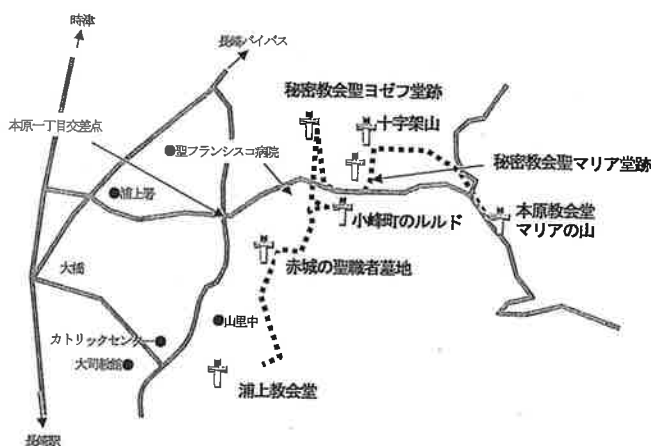
長崎巡礼月間

巡礼ウォーク(浦上コース)

今回は、11月28日と29日に浦上で行われた巡礼とデ・ルカ・レンゾ師による講演内容(福者ペトロ岐部神父)の一部を記載します。

浦上巡礼コースは、49人の参加者と12人のスタッフで行われ、本原教会のマリアの山から十字架山↓秘密教会(聖マリア堂跡)↓秘密教会(聖ヨゼフ堂跡)↓小峰町のルルド↓浦上教会内「拷問石」まで、2時間半の行程であった。

テーマは、「命をかけた信仰に見る福者ペトロ岐部神父と浦上信徒」で、岐部神父は、日本にいる信徒のためにマカオで司祭を目指したが、神学校が閉鎖されるとマカオからインド、ペルシャを横断して聖地エルサレムに入り、3年の歳月をかけて1620年にローマに着き、司祭になった不屈の人。1630年、再び禁教下の日本に潜入し、長崎に来て、棄教したフェレイラ神父の元へ信仰回復のために死を覚悟して訪れたと言う。ひょっとしたら岐部神父の母マリアが逃れていたかもしれない浦上は、迫害が始まるとキリシタンが隠れ住むようになった地。



この地で信者たちは、代々250年間、禁教下で信仰を伝えるために常に死と隣り合わせの生活を不屈の精神で送り、プチジャン神父が信徒発見の朗報を伝えて世界を驚愕させ、さらに浦上四番崩れと言われる迫害にも耐えた信仰を育てた地。巡礼は、いくつかの信仰の丘、史跡を巡って、語り部からその地で起こったことを聞き、次にペトロ岐部の神と日本人への熱い思いが朗読され、先人たちの深い信仰に思いを馳せた。そして列福式の聖歌がテープで流され、参加者一同感謝の祈りを捧げる形で巡礼が行われた。

巡礼地① 二本木山(マリアの山)

江戸時代、潜伏キリシタンが集まって密かに祈った場所。信徒発見後、1865年の復活祭の火

曜日、プチジャン神父がここで浦上の最後の水方といわれる本原郷平のドミンゴ又市と会い、洗礼に使われることばが有効かどうかを確認した。四番崩れで旅に出る浦上の信徒たちをロケーニユ神父が励ました場所でもある。

巡礼地② 十字架山

1881年(明治14)の十字架称賛日に建立された。

「…迫害の中では生きては血を流し、生命を献げて信仰を守りぬき、死してはその功德をもって子孫の信仰を守るために過酷な拷問に耐え、信仰の自由を守り抜いたことへの神の御加護を感謝し、心ならずも踏み絵を行った信者の罪と多数の信者を殺りくした為政者を許して頂くために贖罪と感謝の場所としてキリストのご受難の聖地カルワリオに似たこの丘を選んで築造された。」(十字架山記念碑のことばから)

巡礼地③ 秘密教会①(聖マリア堂跡)

信徒発見後、浦上の信徒らは大浦からひそかに神父を迎え、秘跡を受け、要理を学ぶために4つの秘密教会ができた。マリア聖堂は、その一つで大浦から浦上を巡回したロケーニユ神父が最初に泊まったところ。のちに浦上四番崩れで旅に出かけ、お告げのマリア修道会の基礎を築いた岩永マキの実家でもある。

巡礼地④ 秘密教会②(聖ヨゼフ堂跡)

本原郷辻の聖ヨゼフ堂は、高木家の10代目ドミ

ニコ仙右衛門が家の一室を提供してできた。現在お告げのマリア修道会十字修道院の裏手にその史跡がある。

巡礼地…小峰町のルルド

原爆で苦しむ人々の心の支えとなるよう、フランシスコ会の修道士ヨゼフ岩永氏の発案でフランシスコ会第三会有志の奉仕によって昭和24年に着工し、25年5月に早坂司教によって祝別された。

巡礼地…浦上教会 拷問石

浦上四番崩れで萩に流配となった浦上キリシタンが正座させられ責め苦を受けた拷問石。萩の牢番の子孫によって引き継がれ、萩教会を経て、2008年浦上教会に運ばれた。

司祭巡礼者、ペトロ岐部

イエズス会司祭

デ・ルカ・レンゾ

今年教会が「司祭年」を祝います。ここで、ペトロ岐部をより身近な司祭の模範として挙げたいと思います。

ペトロ岐部は司祭の召命を受けながら長い道のりを経てその召命を全うしました。人間的に

「絶望的」な状況に遭いながら最後まであきらめなかった彼の姿勢は私たちにメッセージを残しました。当時の責任者から司祭職への拒否を受けてマカオへ渡り、また拒否に遭いました。その段階、ペトロはその拒否が神からのしるしであるかどうか深く考えたでしょう。彼はその困難は神様からの司祭職への拒否ではないという結論に至りました。だからこそ、ローマまで行って司祭になろうと決心しました。つまり、ペトロは人間的な妨げがあっても自分がイエズス会司祭への召命を神から頂いている以上、それが実現されると確信しました。自分のイメージ通りではなく、神の不思議な道に身を委ねるペトロの姿は、現代にも通用する信仰の力を現します。ペトロ岐部が司祭になって、日本で活躍しその日本の教会のために殉教し、福者になったことは彼の正しさを示します。

ペトロ岐部は巡礼者として司祭職の道を通して神に向かって歩きました。信仰に基づいた、明白な目的があったことは彼の原動力であり、彼の支えでもありました。彼には否定的な現象を越えて導いて下さる神の姿が常に見えていたと思います。だからこそ、その目的に至る道に遠回りがあっても迷いがなかったでしょう。神の御旨を探すペトロは、自分の思い込みを神の御旨と名付けたり、頑固に現実とぶつかったりしませんでした。彼は持っているものすべてを神から頂いたもの、神が望む通りに使おうとして生きた司祭の模範でした。ペトロ岐部の生き方にはつきりした線と柔軟性が目立ちます。その神の道から外れないために柔軟に生きるバランスは現代への問いかけ、生きる

ヒントになります。私たちは多くの場合、ペトロと異なり、目的を「柔軟に」つまり曖昧にしながら、それを実現するための方法に頑固に拘ってしまします。

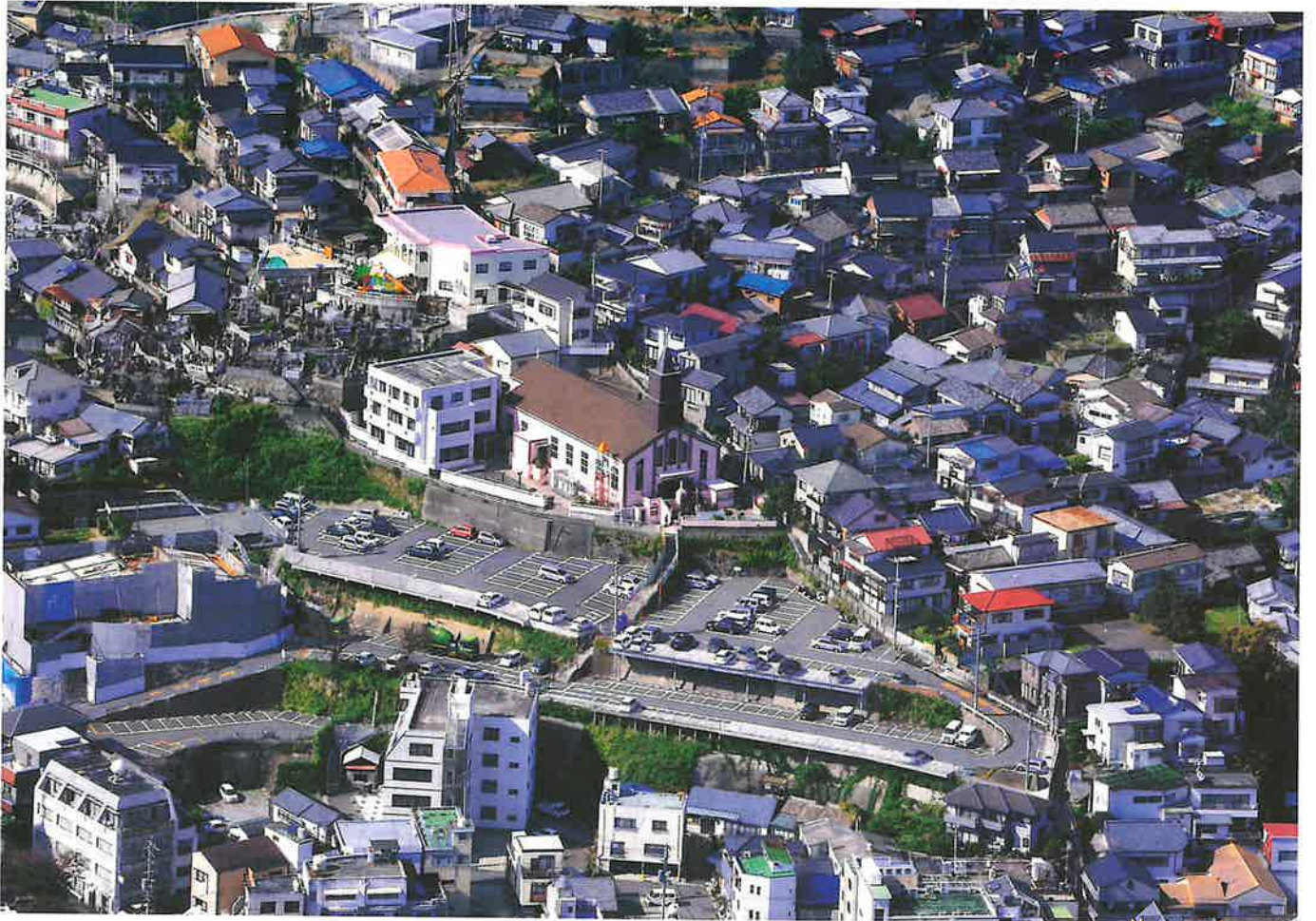
ペトロ岐部は司祭として神と民の仲介者、キリストの代理者として秘跡を授ける喜びを感じました。準備の期間が終わって間もなく日本への道につきます。その道も苦難に満ちた道でしたが、ペトロは与えられた使命に迷いを感じませんでした。命を粗末に落として働けが出来ない可能性が高かったことを覚悟しながら、日本での使命に立ち向かいます。危険な帰国を遂げ、ペトロは司祭として10年間近く活動しました。その司祭職はペトロにとって充実した、神との深いつながりを感じる体験だったに違いありません。

報告を書く人がいなかった時に、ペトロの迫害者であった役人は「ペトロ岐部は転び申さず候」と報告を書き、それが現存することに、目に見えない神の手を感じざるを得ません。「時のしるし」を読み取るペトロ岐部が正しかったのです。正に、イエズス会司祭になるために生まれ、生き、殉教した人間でした。

これは一人の400年前の物語ではありませんが、私たち一人ひとりの物語でありますように祈りましょう。

「自分の召命に満足しており、自分の救霊および同胞のそのために進歩したいという、大きな希望をもっている。」（ペトロ岐部の自己紹介文より）

生活教会 の中の教会



飽ノ浦教会

フォトプラン 山本 富夫

飽ノ浦

長崎港に臨む山の中腹に建つ教会堂。その壁面は信仰の温かさを醸している。

この地の教会の始まりは一九一五年頃、「水の浦」の個人宅でのミサにあるという。

その後、移住により信徒も増え、資金を工面し現在地を購入。

一九一九年、木造の最初の教会堂を建立。三年後には小教区となった。

一九五九年、老朽化と信徒の増加に伴い、新教会堂を献堂。

半世紀を経た教会堂は今、しっかりと根を下ろし、地域の人々を見守っている。